

奴隷 聖徒会長

ヒカル

淫魔に占拠された学園

小説 筑摩十幸

挿絵 亀井

原作 桜沢 大



第一章

妖刀の少女

006

第二章

巫女少女乳辱

067

第三章

淫魔に改造される聖少女

127

第四章

デュアルソウル

178

第五章

淫夢に堕つ

232

登場人物紹介

Characters



いづみ
泉ヒカル

親の形見「鬼太刀」で妖魔と戦う生徒会長。両親を亡くすも、弟のショウとともに前向きに生きるわんぱくな少女。



カムイ
セイラ・神居

生徒会副会長。拳銃を武器に闘う、誇り高いシスターのお嬢様。



あやつじ
綾辻ユキ

退魔の名門、綾辻家の令嬢。一見おっとりした外見だが、陰で生徒会を支えるしっかり者。



アナスタシア・アウグスト

強大な力を秘めたゴスロリルックの少女。聖マリス学園の学園長。



しらいしことね
白石琴音

生徒会顧問の女教師にして、ヒカルの剣の師匠。

バルムス

聖マリス学園を狙う妖魔。

ヴェゼル

学園の裏で暗躍する妖魔。

「え……ああっ!？」

ヴェゼルに誘われて黒板に映った自分の影を見ると、股間に太い丸太のような影の杭を埋め込まれていた。そして影男根が激しくピストンするのにあわせて、狂おしく腰を振り立てているのではないか。

「あ、ああ……」

切なげな吐息がこぼれ落ちた。それは超常の現象を見せられたからではない。自らの影から漂ってくるあまりにも過激な淫気にあてられてしまったのだ。

うねるように舞い、極太の杭を呑み込む牝腰。千切れんばかり激しく揺れる乳房。右へ左へ振り乱れる黒髪。そして肉悦に笑みを浮かべ、だらしなく舌をはみ出させた口元。

(なんて……いやらしい……なんて……ふしだらな)

それらがモノトーンの影絵からハッキリ伝わってくる。いや、影のみゆえに、却って生々しく感じられるのだ。喘ぎ声まで聞こえてきそうだった。

「あなたもあんな風にされたいのではありませんか？」

蜜壺を挟むようにかき回しながらヴェゼルが迫った。

「はあ、ああ……ううう……ん」

ハッキリ否定もできず、琴音は呻くような声を噛み締めた歯列の間から漏らす。

ヴェゼルの指はイカせるつもりはなく、ゆるゆると焦らすように動いている。自分の影がくわえている極太に較べて、なんと物足りないことだろうか。

「あんな風に太いモノで責められたいのでは？ あの時のように子宮まで突き上げられたいのでは？」

「ちがう……あ、ああうう……ン」

過去の絶頂の記憶と、目の前で繰り広げられる影の痴態が、琴音の精神を挟み撃ちに責め立てる。子宮が真っ赤な炎に包まれ、お臍の奥がカアッと熱くなる。

「もうすぐあなたもあなる。妖魔に犯され、悦んで腰を振るようになるんですよ」

「はあっ……はあっ……ちがう、ちがうっ！ 妖魔になんて……私は負けない……っ！」

気がつけば腰が影とリンクするように動き始めていた。二本の指に攪拌される花びらはすっかり開ききり、熱い滴りをトロトロと溢れさせてしまう。

「頑張りますね。もう少し素直になれるようにしてあげましょう」

ヴェゼルが手招きをすると、教室に一人の男子学生が入ってきた。岩のような筋肉質の巨体の持ち主は黒沼源二だった。

「グフフ。先生、色っぽい格好だな」

「く、黒沼君……あなた、どうしてここに!？」

思いもよらぬ人物の登場に一瞬狼狽^{うろうた}えた琴音だったが、すぐに状況を理解した。

「よ、妖魔に操られているのね」

「さあ、どうだろうな」

目つきはいつも以上に獣欲にまみれ、口から吐き出す荒ぶる呼吸も生臭い腐臭を漂わせ

る。

「うう……ヴェゼル、許さないわよ！」

不良とはいえ教え子に違いはない。教師としての怒りが沸々とこみ上げて、蕩けきつていた美貌に聖気が蘇る。

「オマ○コ濡れ濡れで格好つけるなよ、琴音センセイ」

嫌みっぽく嗤った黒沼が、ズボンを下ろし肉棒を取り出した。

「ひっ！」

そのあまりの威容に琴音は喉を軋ませた。そびえ立つ黒い塔のような男根は、普通の男の倍近い太さと長さがあり、さらに肉胴には不気味な肉イボが無数に突き出している。そのイボの合間を網目状に走る血管も太く、ミミズがのたうっているようだ。

龟头には大きく広がったカサが、鏃やじりのように鋭角に突き出している。先端の鈴口から不浄の粘液とともに強烈な精臭が漂い、離れていても鼻が痛くなるほどだ。おそらく妖魔の影響を受けたのだろうが、あまりにも醜悪な肉塊に吐き気を覚えた。

「すげえだろウ先生。こいつで啼かせてやるからな」

シュッシュッと軽く手でしごくとき、肉太刀はグンッと一段高く反り返った。切っ先は女教師の聖域にピタリと狙いを定めている。

「妖魔には激しく抵抗するあなただが、教え子相手ならどうでしょうね？」

「ああ……そんなのいやっ！ 教え子と……関係を持つなんて……絶対いやよっ！」

「にがさねえぞっ！　うりやああああああっ！」

クネクネと左右に揺れる腰を黒沼がガツシリつかむ。逃げ道を失った媚孔に、黒沼の巨根がジワジワと埋まっていく。

「うあ……あ、あああああああああっ！」

凄まじい圧迫感だった。身体全体が膨張してそのまま風船のように爆^はぜてしまいそう。

「グハハッ！　先生のオマ○コ、なかなかいいぜっ！」

苦痛に引きつる粘膜の層をさらにこじ開け、極太勃起が沈んでいく。伸びきった粘膜が血管が透けそうなほど拡張されているが、それでもなんとか無事に亀頭部を呑み込んだ。

「ここまでくれば、こっちのもんだ。ホレホレ」

「うく……ああ……きつい……うああああっ」

関所をくぐり抜けた勃起はその勢いのまま、一気に最奥にまでズブリと押し込まれる。痛みとともに快美の電流が、股間から放射状に全身にジーンと拡がっていく。

「先生のオマ○コ、俺のチンポでいっぱいだぜ」

勝ち誇ったように嗤う黒沼。それでも根本から三分の一ほどは外に出ている状態で、呆れるほどの大きさである。

「ハアハア……あう……や、やめなさい……黒沼君……こんなこと……うう……だ、だめよ……許されないわ」

弱々しい声で黒沼の良心に訴えるのだが、もともと性欲の塊のような黒沼には、まった

く効果がなかった。

「先生。俺が教えてやるよ、女の悦びをな！」

いよいよ黒沼が本格的に腰を振り始める。巨大な拳のような亀頭が、何度も子宮に重く打ちつけられる。

「あつぐう……ふあ、ンあああつ！ ひい、あああ！」

ズシーン、ズシーンと骨格をひしゃげさせる勢いで打ち込まれるピストン。まるで鐘撞き棒を勢いよくぶち込まれているような凄まじい衝撃だ。

ジュボッ！　ズズズ……ジュボオオッ！

「どうだあ？　俺のチンポは？　触手なんか眼じゃねえだろ？」

「うぐう……こ、壊れちゃう！　んあつ！　だめ……さ、裂けるうっ！　あ、あぐうっ！」

一衝きごとに骨盤が軋み、子宮が打ち上げられて胃を押し上げる。身体がバラバラになるような破壊的な陵辱だった。

「グフフ、どうだい先生。教室で教え子に犯される気分は？　オラオラ、気持ちいいだろうがっ」

わざわざ琴音が嫌がる言葉を選んで蹴り抜く。妖魔だけが相手なら心を張り詰め、こらえることができたかもしれない。だが教え子と契らされるという罪悪感が、琴音の心の壁に大きな孔を穿^{うが}っていくのだ。

「んあああ！　だめ……黒沼君……ああああ……正気に戻って……んぐううあああつ！」

妖魔に犯される屈辱と、教え子に犯される背徳感が混ざり合い、ドロドロの肉悦となって子宮に流れ込んでくる。

「俺は正気だ。ずっと先生とこうしたかったのさ」

「そんな……うう……私は教師……あ、あ、ああ……こんなこと……許されないのよ……ううん！」

教師としても退魔師としても敗北を味わわれ、琴音は火がついたように赤い顔を振りたくる。しかし爆撃のような責めを受け続ける子宮が、熱く火照ってジンジンと疼き始めた。

ドズッ……グチュッ……ジュブッ……ズブブッ！

教え子の肉棒が子宮に打ちつけられるたびに、背徳感と淫楽が同時に女を中心に叩き込まれる。感じてはいけない、相手は教え子なのだと思えば思うほど、倒錯した愉悦がメラメラと燃え上がった。

「はうううん……こんな……こんなあ……」

垂直に突き上げられながら、琴音はグラグラと頭を振る。触手責めを受けたときを遥かに上回る官能の高まりが、爆発寸前のマグマのようにこみ上げてくる。

「すごいヨガリっぷりだな。いつも教室で上品な先生面していたのが、嘘みたいだぜ」

「ああ、ああ……いわないで……お、おとおっ！ 深い……んんっ！ 奥まで……き、来てるうっ！」

声を抑えられなくなり、上体が弧を描くように反り返っていく。我知らず突き出される格好になったクレヴァスが、男根を受け入れやすい角度になつてしまう。

「俺のチンポの良さがわかつてきたようだな」

手応えを感じつつ、これでもかと媚肉をこね回す。火照りきつた柔褌にいくつもの肉イボを食い込ませ、引き剥がさんばかりに研磨していく。

「ンあああああつ！ い、いぼが……あああつ！ こ、擦れて……ひいいんんつ！」

（こ、これが……く……黒沼君の……オ……オチンチン……な、なんてスゴイの……）

触手とは大きさもパワーも何もかもが違う。何より相手を犯し抜き、屈服させようという強烈な情念が、男根の威力を数倍に増幅させていた。

ズーンズーンと打ち込まれるたび、目の前が桃色に霞んでいく。肉体のみならず、魂まで犯されるような凄まじい快感。子宮から噴き上がる火柱に灼かれ、脳が焼け焦げてしまひそう。

「も、もうやめて……黒沼君！ おかしくなっちゃうつ！ あ、ああ……ン！」

「もっとおかしくなれよ。狂わせてやるぜ。教師といつても一皮剥けばただの牝だつてわからせてやるよ」

「うあ……だめよ……あ、ああンつ！ お願い……こ、これ以上されたら……ああつ！」

最奥までぶち込まれて、おとがいを裏返らせる被虐の女教師。逆さまになった教室の光景に、多くの生徒たちの幻が浮かび上がる。

(ああ……みんな……)

数時間前まで学園中の生徒たちから憧れと尊敬の眼差しを受けていた自分が、教室で不良生徒に犯され、あられもない痴態を晒してしまっている。

「あ、あん……どうしてなの……妖魔は倒したはずなのに……ンああ……こんなの嘘よ……こんなこと……あ、あるはずないわ……ううっむ！」

突然の事態を理解できず、悪い夢の中を彷徨^{さまよ}っているのではないかという気がしてくる。

「嘘じゃねえよ、先生。コイツが現実だ」

「ンはああああああっ！」

ズブリッと子宮を串刺しにされ、乳房をギュウッと握りつぶされた。上下の快楽神経が連結され、快感が数倍に膨れ上がる。夥しい牝蜜が溢れ出て、教壇にポタポタと染みを作っていく。

「グフフ。教壇にまでマン汁垂らしやがって、やっぱり先生は牝だったな」

「め……す……」

力強いピストンにユサユサと揺さぶられながら、琴音は恍惚とした様子で呟く。

「そうだ先生は牝だ。教室で教え子にレイプされてよがっている、変態牝教師なのさ」

「牝……私は……め、牝……あ、あああンッ！」

被虐の言葉を言わされるたび、得体の知れない昂奮でゾクゾクとうなじが栗立った。乳肉が液体が詰まっているかのように波打ち、熱い吐息を吐き出す腹筋が盛んに上下する。

頭上で両の拳がぎゅうつと握られ、パンストの残骸を纏ったつま先が何度も反り返った。

「イキそうなんだろう、先生。教え子のチンポにレイプされるのが気持ちいいんだろう？」

「うああ……はああ……っ」

もうこらえきれなかった。圧倒的な男根の魔力に魂まで溶かされてしまう。

「あぐあ………感じてる………あう………教室で………教え子の………く、黒沼君の………おチンポでレイプされて………ああん………感じてるわ………ううんっ」

濡れた恥声を振りまき続ける琴音。媚粘膜も男根に吸いつくように密着し、屈服を示していた。

「ククク。そろそろ仕上げに入りますかね」

赤眼を煌めかせたヴェゼルの腕の影が、女教師の影の胸にズブズブと埋まっていく。肘の辺りまで埋まって決るような動きに変化する。

「ひ、ひい………入って………くるううっっ！」

もちろん琴音本人に外傷は一切ない。にもかかわらず、おぞましい感触に胸の中をまさぐられている。指一本一本の動きまで感じ取れた。

「あきやあああっ!! し、心臓があ………っ!!」

大きく広がった五指にガッシリと心臓を鷲づかみにされている。想像を絶する異常感覚だというのに、琴音の表情はどこかうっとりとしていた。

「イかせてやるぜ、先生」

黒沼に深々と子宮口を抉られ、琴音は何度もおとがいを突き上げる。

さらに全身に貼りついた影蛇もいつそう激しく蠢いて、全身の性感帯を責め立ててきた。
「おら、先生。何度でも言うんだよ」

「ああああん。琴音は……き、教室で……教え子の……黒沼君の、お……おチンポで……あ、はあっ……レ、レイプされてよがっている……変態……牝ですう……ンあああああっ！ オマ○コ感じちゃうっ！」

別人のように乱れ、悦楽の淫舞を踊る女退魔師。衝きほぐされた秘奥の肉が、ねっとり
と男根に絡みついて奥へ奥へと吸い込むように蠢く。

「こりやすげえ。もう我慢できねえ、ザーメン注ぎ込んでやるからな」

「ああん……それだけは……はああ……中はだめえ……あ、ああああ……き、きちゃうう！ 出されちゃう！」

喉に巻きついた蛇には気管が圧搾され、何匹かは巨根の合間を縫って膣内にも侵入している。ヴェゼルにモミモミと揉まれる心臓までもが快感だった。細胞単位で発情させられ、身体中が淫らの炎に包まれた。

「おらあああっ！ くらえええっ！」

黒沼が吠え、肉棒が女体の最奥まで突き立てられる。剛直に激しい痙攣が走った直後。
ドビュドビュドビュッ！ ビュルルルルッ！

大量の白濁がマグマのように噴出し女教師の子宮口に叩きつけられた。灼熱感が快美の

矢となつて琴音の子宮を串刺しにする。

「あきやああああンッ！ イクッ、イクウウツツ!!」

ウェーブしたロングヘアをバラバラに乱れさせ、オルガに登り詰める牝教師。

絶頂の痙攣で媚肉が収縮し、さらに精液をねだるように勃起男根を食った。

「まだ出るぞ！ おらおらあッ！」

肉棒が脈動しながら、延々と射精を続ける。膣内に収まりきらない白濁が、結合部からドボドボ溢れて床に垂れ落ちていく。

「ンむあああッ！ アツイイッ……あはああ……いつてるのに……またあ……ああ……イクッ！ イッチャウウウウ……あはああ……いつてるのに……またあ……ああ……」

プシヤアアアアアアアアアッ！

ついには失禁までしてしまい、琴音は白目を剥いて汗まみれの全身をガクガクと痙攣させた。

「我が手に堕ちろ。白石琴音！」

影の腕が一気に引き抜かれた。その手には心臓の影が映っており、ドクンドクンと脈打っている！

「ああああ——ッッ！」

魂が闇に吞まれ、咀嚼され、食い尽くされていく。光を失った瞳は淫らな媚を浮かべて新たな支配者を見つめていた。



「はうううっ!! きやうああ~~~~んっ!!」

松かさのようなゴツゴツした突起が、未成熟な柔髪に食い込んで、ユキは悲鳴を迸らせた。だが激痛の中に一瞬、腰椎を痺れさせるような未知の感覚が紛れ込んでいることに気づく。

(い、いまのは……一体……?)

「ヒヒヒ。オマ○コもよい具合に蕩けてきましたぞ。締まりもなかなかいい。さすが名家の道具は違いますなあ」

急速に変質していく自分の肉体に混乱する令嬢を、昭三がここぞとばかり責めてきた。生硬な蜜肉を揉みほぐすように、しつこく丁寧な松かさ突起を擦りつけてくる。

ズブッ! ジュボォッ! ズボッ! ジュブッ!

「ひっ! い……い、痛いっ!」

「もう痛みはないはずじゃ。これだけ濡れておるのじゃからのお」

「うう……そんなはず……ない……あ、ああんっ!」

ズンズンと子宮を突かれるたびに、得体のしれない感覚が徐々に大きくなってくる。くすぐったいような、熱いような不思議な喧噪が、蜜髪一枚一枚に染み込んでくる。

そこから生まれた快楽の火花が、パチパチと子宮の底を焦がし始めた。

(ああ、私の身体……どうなって……)

子宮の熱が縦長の臍を裏側から焙る。上品な曲線を描く腹筋に、淫らな汗が沸々と浮き

上がってくる。いつしか抽送を受ける蜜壺から、淫靡な水音が響き出していた。

「はああ……こ、こんなことしても……ああ……む、無駄なんですから……私は……絶対……あなたの思うようには……な、なりません……ンはああンッ！」

健気に反抗の意志は見せるものの、切なげにたわめた眉根がピクピクと震え、可憐な唇からも、ハアハアと熱い吐息が漏れ始める。吊られた足袋のつま先が、開いたり丸まったりを繰り返している。妖魔にねちっこく責められて、女としての反応を抑えきれなくなってきた。

「どうですかお嬢さま。オマ○コのお加減はよろしいですか？」

「うう……どうして……どうしてこんな……こ、殺したいなら……早く殺しなさいっ！」

妖魔が女を襲うのは精気を吸収するためか、あるいは単なる嗜好か。いずれにしろ衝動的で暴力的な行為だと聞かされていた。これほどじっくりと時間をかけて責めてくるとは想像していなかった。

「そいつはこの男、黒沼昭三の執着心の強さじゃよ。よほど綾辻とお嬢さまに愛憎があったようじゃな。憑依ではなく同化した場合、元の人間の影響は避けがたいからのお」

マシユマロのように柔らかな耳たぶを舐めながらニヤリと嗤う。

「妖魔の儂としても、お嬢さまを孕ませ、儂の仔を産ませるのが目的じゃから、利害は一致しておるわけじゃな」

「は、孕ませる……ですって……!？」

妖魔昭三の言葉にユキは戦慄する。犯し、汚すだけが目的ではなく、妖魔の仔を産ませようというのだ。

「だ、だめっ！ そんなことは、絶対に許しません！」
狂乱したように全身を足掻かせるユキ。

「この身体は……あ、綾辻の八百年の歴史そのもの……それを……妖魔の仔を孕まされるなんて……絶対に許されません！」

「だからこそ面白いのじゃ。憎き綾辻の血統も僕も僕のチンポの前に崩れ去るとは痛快無比じゃ。ヒヒヒ。それにその綾辻の母胎なればこそ、妖魔王の器となるやもしれんのじゃ。そうなれば僕は……」

ギョロリとした眼に野望をのぞかせながら、ドスドスと子宮を突き上げる。

「はうっ、はああんっ！ よ、妖魔王の……ああん……う……器……？」

生まれて初めて感じるお腹の底からこみ上げてくる熱感に、脳が煮えたぎり思考が途切れそうになる。いつも冷静なユキだったが、執拗な妖魔の責めに理性を保つのも難しくなってきた。

「おっと喋りすぎたわい。お嬢さまは何も考えず、僕の仔を孕むことだけ考えておればよいのじゃ」

「ひあっ！ ああああんっ！ いや、いやあっ！」

子宮が跳ね上がるほど激しく突かれて、ユキの身体がエビ反った。処女肉から放たれた

電撃は、子宮を経由して乳房にまで届く。

「う、うぐう……ひい……ひびく……お、お乳にも……響いてえっ……ああーん！」

膨張させられた乳房がゴム鞠のように跳ね、鎖がチャリチャリとせわしなく鳴る。振動が鍼から乳肉の奥深くにまで響いてダメージを増幅させた。

「あむう……あああっ！ いやあ……そんなに激しくされたら……ああ……っ！」

おかっぱをバラバラに乱れさせながら、日本人形のような美貌を反らせるユキ。色白の頬は赤く染まり、幼げな童顔にハッとするような色香が漂い始める。左右に振り立てる腰の動きも、拒絶の動きにしては弱々しい。

「ヒヒヒ、もう一息のようじゃな」

掌でタプタプと乳房を触診する昭三。ズッシリとくる重さは水分たっぷりの特大スイカといったところか。柔らかく自在に形を変えていた乳肉も、今はパンパンに張り詰めて指を弾くほどの硬い弾力へと変化している。

乳腺の急成長についていけない乳輪は薄く伸びて拡がり、肌との境界がやや曖昧になっている。乳頭は鍼の影響をもろに受けたせいか、確実にサイズを増していた。直径が親指ほどの太さになり、今にも母乳が噴き出しそう。まるでミルク樽に刺さったコルク栓といった感じだ。

「伝わってきますぞ、お嬢さまのオッパイ中で母乳が大量に作られているのが」

勃起乳首をシュッシュッとしごき、昭三がにんまりと囁う。赤く膨らんだ乳首が苦しげ

にピクンピクンと震え、鍼を吐き出そうとしているかのようなのだ。

「はあはあ……うそ……うそ……です……くうん」

クナクナと首を横に振るが、それを一番実感させられているのはユキ自身だ。乳房の中で乳腺がトクントクンと脈動しているのがハッキリわかる。そして沸かしたてのホットミルクのような熱さが、二つの宝玉の中にどんどん充滿してきていることも。

（ああ……お乳が……はちきれそう……か、身体が熱くて……なにかが……溢れてしまいそうです……）

「ハアハアッ！ あああ……だ、だめ……身体が……頭が……変になって……あああん」

挟まれる膣肉と乳房の淫熱が、相乗効果で令嬢巫女を追いつめていく。雪白だった肌が色っぽく上気し、美貌にも乳肌にも夥しい汗が噴き出していた。おびただ

これまでの人生で身につけた上品な所作も、高貴な雰囲気もすべて奪われ、生身の『牝』へと剥かれてしまう。

「もっと変になるのですよ、お嬢さま」

チリチリチリチリ……！

昭三が魔乳鍼の鎖に呪力を込めると、鍼が入るときとは逆に回転し始めた。

「ひいいいっ！ お、お乳が……！ あああああっ！」

鍼がゆっくり回転しながら押し出され、半分ほどが露わになる。銀に輝く鍼は白い液体で濡れていた。

「はあああ……やめ……ああ……ああ……」

鍼が後退したことで胸の圧迫感が僅かに緩和され、ユキはその解放感に脳を揺さぶられるような感覚を味わわされていた。しかしそれは次の地獄のための準備段階だった。

ジュブッ！ スブブブブッ！ ジュブジュブジュブウッ！

鍼がすぐさま正転し、またしても乳房の中に埋まってくる！

「ああああ
——ッ!!!」

解放感を味わった直後だけに、苦しさは倍増する。天井を向くほど反り返った美貌が、舌を突き出して痙攣した。

「ヒヒヒ。こいつは効くでしょう」

（ああ……胸が……お乳が……壊れちゃうっ！）

本来狭いはずの乳首を、押し広げられ、挟まれ、擦り上げられ、気が狂いそうな快感を味わわされる。それに加えて、乳腺を圧迫する異様な感覚が内側からユキを苦しめる。もう呼吸もままならず、乳を揉まれるたびにヒイヒイと喉を軋ませるばかりだ。

「これをご覧なさい、お嬢さま」

「はああ……うう……あ、ああっ！」

搾り出された乳肉に目を向けると、ニップルの下で乳輪までもがぷっくりと膨らみ、乳房は見事な三段重ねとなっている。ユキの上品なスレンダーボディにはあまりにも不釣り合いな、淫蕩な乳果であった。

しかも乳頭の先端からは白い液体がポタポタと滴っているのである。

「ひどい……こんな……こんなのいやですっ！ ああ、お父様になんと言って……お詫びをすれば……あ、あああんっ！ やめて……も、もうやめてえっ！」

肉体を淫らに造り替えられていく様を見せつけられ、ユキはショックのあまり目眩を感じた。だが、休みなく幼い子宮を突き上げてくる魔根のピストンが、絶望に沈むときも与えてくれない。

「四十以上も歳が離れた狒狒爺ひびじいと愛し合って赤ちゃんができました、オッパイも出るようになりましたと言ってやればよからう。ヒヒヒ。次に御館様に会うときは初孫と一緒にじゃ。キヒヒヒッ！」

暗い怨念を激しい淫欲に変えて、これでもかと膣肉を抉り抜く。

ズッ！ ズリユズリユズリユッ！ ズズズッ！

「あっ、あっ、あああん……孫なんて……そんな……そんなのだめ……はああうんっ！」
肉棒を覆う硬い鱗状の突起に柔褰が摩擦され、マグマのような熱い衝動が子宮からこみ上げてくる。それは乳房の破裂寸前の切迫感とリンクして、ユキを生まれて初めての官能の頂上へと追いつめていく。

「ほれほれ、そろそろ気をやるのじゃ。我慢しても無駄じゃぞ」

スライドを刻まれるたび、巨乳同士がぶつかり合って、上に下に左右に、ブルンブルンと激しく揺れまくる。巨大なアメリカンクラッカーにされた乳肉から、凄まじい乳悦と焦

れったさが雪崩れ込んでくる。

「はあ、はあ……いい、いや……いやあ……お乳が……あつ、ああん！ アソコがあつ」

魔乳鍼の抜き差しと連動させた腰使いが、こらえようという気持ちも粉々に打ち砕く。まるで乳房と膣を二本の杭で串刺しにされてしまったようだ。さらに早鐘を叩くような動悸が、狂った血流を脳に流し込んできて思考力を削り取っていく。

「ハアハア……ああ……も、もう……うう」

制御を失った身体は快楽に従順に反応して、腰が前後にはしたなく舞い始めた。蕩けきった蜜壺は本人の意志を無視して妖魔老人のどす黒い男根をキリキリと食い締めてしまう。「ンああ……くるしい……あああう……お、お乳が……くるしい……！」

だが、ユキが絶頂に登り詰めることはなかった。爆発寸前の乳の苦しさが、イクことを許さないのだ。その焦燥感が、乳圧の拷問と相まってユキを苦しめる。

「ヒヒヒ。鍼を抜いて欲しいですか、お嬢さま」

鎖を揺さぶられ、ユキはガクガクと震く。追いつめられた巫女少女に選択の余地はない。「ここからミルクをいっぱい出したいのですか？ このオッパイから牝牛のように」

「ううっ！ ミ、ミルク……ああ……ミルクう……」

鍼責めから解放されたくて、令嬢はついに唇を開いてしまう。

「オ、オッパイから……牝牛みたいに……ああ……ミルク出したい……出させてえ……うあああッ！」

言い終わると同時に瞳から涙が溢れ、乳首の先からも限界ギリギリの母乳がピュッピュッと飛び散った。

「ヒヒヒ。お嬢さまは僕のモノになるのじゃ！ おおっ、出る！ 出ますぞおおっ！」

憧れの令嬢を貶める昂奮に衝き動かされ、ペニスがドスンと最奥に突き立てられた。次の瞬間、

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュルルルウウッ！

勃起が激しく痙攣し、噴火のような勢いで白濁精液を巫女少女の膣内にぶちまけた。

「あきやあああああああつ!!」

身体を真つ二つに焼き切られるような灼熱感と汚辱感が、脊椎を駆け上がって脳天を直撃する。思考回路がショートして頭の中で火花が散った。

「こつちもいかせてあげますぞ！」

鎖がジャラッと引かれ、魔乳鍼が二本同時に抜き去られた。

「ひいっ！ きひいっ！」

子宮から脳までを直結していた火柱から両の乳房にもエクスタシーが飛び火した。

「あああああつ！ く、くる……なにかが……あひい……きちやううっ！」

熱い潮流が乳腺を駆け上がり、乳輪に集中した。圧縮されて爆発的に高まった圧力が乳首を震わせてポッカリ口を開けた乳管から一気に解き放たれる！

プッシャアアアアアアアアッ！



「二人はわたくしの紅い翼を見たとき、綺麗だと……フフ……昔から変わった姉弟でしたわ」

微笑に微笑んだあと、セイラはすぐに冷徹な表情に戻った。

「さあ、ここから脱出しましょう。ヒカルたちが危険ですわ」

「そうですね。でも……どうすれば……」

手首に嵌められた枷は頑丈で、とても外せそうにない。

「わたくしがやってみますわ……」

体内の闇の力を慎重に探ると、残り火のように小さな力が^{くすぶ}焦っているのがわかった。いつでも発動できる状態だ。できれば使いたくない力だったが、仲間を救うためなら躊躇する理由はない。だが――。

「うつくつ!? ああああああああつっ!!」

急に顔をしかめ、セイラは両手吊りの身体をガクガクと痙攣させた。闇の力が急激に膨れ上がったのだ。

「セ、セイラさん!」

「う、うあ……な、なに……身体が……あ、熱い……ううつ」

ドクン! ドクン! ドクン! ドクン!

身体の奥深くで、何かが荒々しく蠢いている。下腹、子宮の辺りが熱波の中心であった。その熱は同心円状に拡がりながら神経、血管をざわめかせる。細胞の一つ一つが、卵の殻

が弾けるように目覚めていく。

「ああ……こ、この……静まれ……うああああう」

アポトーシスとマイトーシスが相克し連続する。すべての細胞が一瞬にして別のモノに置き換えられていくような感覚。

「始まったようだな、キヒヒヒ」

そこに姿を現したのは木脛だった。ペタペタと安っぽいサンダルを鳴らしながら近づいてくる。その表情には確信めいた邪悪な笑みが浮かぶ。

「セイラさんに何をしたんです!？」

キッと木脛を睨みつけるユキ。セイラと再会できたお陰で、破瓜のダメージからかなり立ち直ることができていた。

「淫魔病ウィルスに感染させてやったのさ。キヒヒ、潜伏期間が終わって、いよいよウィルスが活性化を始めたわけだ。第一段階は発熱……身体が熱いだろ、金髪。身体を造り替えられる気分はどうだ？ ヒヤヒヤヒヤ」

「ハアハア……う、うう……くそ……ハアハア……」

身体の内側から高熱に焙られるセイラはまともに返事もできなかった。目の前に陽炎がたって、意識も朦朧としてしまう。

「淫魔病ウィルスですって!? セイラさん、ウィルスなんか負けてはダメです! 聖気を集中させてください!」

「くはああ……あ、ああ……わかつて……ますわ……ううっ」

アドバイスに従って聖気を練り上げると、発作は急激に治まった。高熱も潮が退いていくように下がっていく。ウィルスの活性化を抑えられたようだ。

「ちっ、邪魔をしやがって。この牝牛があ！」

「きやあっ！」

思いきりビンタを叩き込まれ、ユキは意識を飛ばされてしまう。

「ユキッ！ き、貴様あ……」

「お前ももつと調教が必要だな、うらあっ！」

ドッカアアアアア！

「ぐは……っ」

鳩尾に重いパンチをめり込まされ、逆流した胃液が食道を灼いた。激痛と嘔吐感で目眩を感じる。

「お前は楽に気を失わせないぜ」

ドカッ！ ドスッ！ ドカッ！ ドスンッ！

連続のボディ攻撃が、腎臓や肝臓を狙い打つ。吊られた細身の身体は、大きく前後に揺れ、まさにサンドバッグ状態だ。

「ぐあ……うおえ……あく……ぐああああっ！」

胃液を吐き散らし、白目を剥いて悶絶するセイラ。内臓がひっくり返るような地獄の苦

しみを散々味わわれ、ついにはブレーカーがおちるように意識がぷつりと寸断された。

気がつくと手術室のような部屋に移され、医療用ベッドの上に左右の手首と足首をそれぞれまとめて縛られていた。股間はM字を描いて大きく拡がり、すべてをさらけ出してしまっている。

「さて、第二ラウンドといくか」

脚の間にポジションを取った木脛がニタニタと嗤いながら、いやらしい視線を絡ませてくる。

「やはり日本人とは体つきが違うな。オッパイも迫力があるぜ。シリコンでも入れているのか」

体脂肪率が低そうなスレンダーなボディに、二つの乳房がプルンと自己主張している。グンッと砲弾型に盛り上がるダイナミックな造形の割りに、東洋系の肌のきめ細かさが、一歩間違えば下品にもなりかねないところを見事な美乳にまとも上げていた。乳首もツンと尖って、誇らしげに天井を向いていた。敬虔なシスターの青い聖衣を身につけているだけに、そのギャップが色気を数倍に高める。

次に目を引くのは手足の長さとお八頭身はあるだろうスタイルのよさだ。

白いガーターストッキングに包まれたしなやかな美脚が、照明を浴びて眩しい輝きを放つ。折り畳まれてはいても股下の長さは日本人の平均を遥かに超えるのが一目でわかる見

事な脚線美だ。

「ウィルスが効いて、そろそろ男が欲しくなってきたんじゃないか？」

肉土手はなだらかな盛り上がりを見せ、その上を金色の草むらがふっさりと飾っていた。セイラは三人の中では一番発育がよく、ヘアもやや濃いほう。女性器もラヴィアが適度な肉厚でほころび、早熟な大人の雰囲気漂わせている。

処女を失って間もないが、陵辱の痕跡もなく、聖女そのものの慎ましさを回復していた。「ふ、ふざけないでくださるかしら。何を馬鹿なことを……」

「ウィルスに冒されてまだ諦めていないのかよ。まあ、これから気位の高いシスター様がどう変わっていくか、楽しみだぜ」

「フン……」

木脛の挑発にセイラはもう応えなかった。いや、余裕がなかったと言うほうが正しいかもしれない。

(……身体が……つくう……熱い……)

意識を失っている間にウィルスが勢力を拡大したのか、再び高熱が襲いかかっていた。だがそれを相手に悟られてはまずい。

「だんまりかよ。こっちは勝手にやらせてもらうぜ」

正面からのしかかる木脛のペニスが、尻肉の谷間に潜り込む。異形の先端は、しかし膣孔からずれていた。

「!? そ、そこはっ!」

ビクッと肩を震わせ、思わず狼狽の声を漏らす。おぞましいことに、木脛のペニスが押し当てられたのは、恥ずかしい排泄孔だった。

「オッパイやオマ○コもいいが、俺が一番狙っていたのはここなんだ」

「ば、馬鹿なことを! そんなこと、まともな人間のすることじゃありませんわッ! あ、ああ……離れろ! この変態!」

予想外の箇所を狙われ、シスター少女は美貌を引きつらせた。信仰する教義に反する背徳行為であり、何より排泄器官で男根を迎え入れるなど、常識外の蛮行だ。

「洋モノビデオじゃ、普通にやっているぜ。もっともお前はもうすぐ人間じゃなくなるんだから、問題なしだぜ、ヒヤヒヤヒヤヒヤッ!」

さらに覆い被さるようにして、木脛が体重をかけてくる。侵攻の圧力が増し、肛門括約筋が無理矢理こじ開けられていく。

「くうう……っ!」

（それだけはっ! 絶対入れさせませんわよっ!）

すでに純潔は奪われてしまったが、これ以上好き勝手にされるつもりはない。

それに相手は淫魔病ウィルスの宿主なのである。膣部だけの感染なら体内に残った聖気で抑えられるかもしれないが、アヌスまで感染させられてはそれも難しい。

（淫魔になんかにされて、たまるんですか!）

拳を白くなるほど握り締め、セイラは全身全霊の力を込めて、括約筋を窄ませた。

「おお……押し返してきやがる……すげえ力だな」

強硬な抵抗に、木脛も驚きの声を上げる。だがそれで諦めるような男ではない。

「キヒヒヒッ。こいつに締めつけられたら、さぞかし気持ちいいだろうなあ、楽しみだぜ」
却って興味を増した様子で、肉槍を菊蕾にグイグイと擦りつけてくる。不潔な先走り露を塗りたくられ、おぞましきで尻肌に鳥肌が立った。

「う、うう……そんなこと絶対にさせませんわ！ 何があっても貴方のような雑魚妖魔の思うようになるもんですか！」

青い眼光が一瞬木脛を怯ませる。シスター少女の中の強大な闇は、中級妖魔の木脛にとつては恐ろしすぎる存在だ。

「く……生意気な眼だぜ！」

怒りを露わにした木脛が、ガツと口を開き、聖少女の首筋に牙を突き立ててきた。おぞましいことに蝙蝠妖魔は吸血能力も持っていたのだ。

「うああああああつ！」

痛みを感じたのは一瞬で、その直後強烈な麻薬を打たれたような陶醉感で脳がグラリと揺さぶられた。

（力が……抜けて……ま、まづいですわ……）

吸血族には相手を魅了し、虜にしてしまう能力を持つ者がいる。いわば媚薬と洗脳を併

せたような力であり、処女を奪われ聖気を半減させられたセイラにとつては脅威だ。

「ぐっ、ぐふふ……うめえ……やっぱりお前の血……最高の味だぜえ。お前にやられた傷を癒やすにはもってこいだな」

単に吸うだけでなく、柔らかな肌に唇を押し当ててチュッチュッとキスしたり、長い舌でペロペロ舐め回す。肌が爛れてしまうのではないかと思うほどの不快感だ。

「キヒヒヒ。白い肌はいいな。ミルクを溶かしたみたいな匂いと味がするぜ」

いやらしい笑みを浮かべる中年用務員。さらにブロンドを鼻の近くに引き寄せて、ムフムフと匂いを堪能している。

「ああ……やめろお……変態い……ああう……」

昂奮の息遣いを吐きかけられ、首筋がサツと鳥肌立つ。嫌悪感は強まるばかりだが、血を吸い取られ、牙毒を頸動脈に流し込まれ、脳がどす黒い快美感に浸されてしまう。

「ああ……ハアハア……吸うな……うう……この……クズ妖魔めえっ！」

貧血と牙毒によって徐々に意識が溶かされ、身体に力が入らなくなっていく。決死の覚悟で固めた括約筋の防壁も、例外ではなかった。

「緩んできたな、キヒヒヒ。いくぜえ」

「ひっ！ やめ……あああああゝゝゝっ!!」

緩んだ隙を見逃さず、猛々しく勃起したペニスが括約筋の関門をこじ開けた。

「やめろおおっ！ ンああああああっ！」

アヌスの皺が伸びきり、蕾は無惨にも開花させられてしまう。白い尻タブとめり込んだ
どす黒い肉棒のコントラストが、凄惨さを際立たせていた。

「ハアハア……うう……つう……」

力を込めるほど鋭い痛みが生じ、裂けてしまうのではないかとこの恐怖感が抵抗を封じ
込める。どうすることもできぬまま、セイラは折り畳まれた身体を突っ張らせた。

「ヒヤヒヤアッ！ こっちの処女もいただきだあつ！ どうだ、金髪、参ったかあ？ ぢ
ゆうるるるるううつ！」

アヌスを占拠しながら鮮血を啜り、木脛は征服感に酔いしれている。

「くううつ……わ、わたくしの身体から出て行け！ ああ……もう吸うなあ……うう」

二つ目の処女も奪われて、セイラは呻くような声を漏らすばかり。松明を突っ込まれた
ような熱さが、肛門内のペニスの存在をハッキリと伝えてくる。

（とうとう……お尻まで……こんな奴に……犯されるなんて……）

ある意味ヴァーヂンを奪われたよりも、汚辱感は大きかったかもしれない。激しい怒り
と憎悪が、嵐のように胸中で渦巻いた。

「おお、熱くてキュウキュウ締めつけてきやがる……思った通り極上の尻だぜ」

少女の心などお構いなしに、木脛は血を啜り飲みながら、肉棒を根本まで沈めにかかる。
「うあ……も、もう入れるな……つくああ……」

メリメリと音がせんばかりに肛門粘膜が拡張され、さらに伸びきっていく。凄まじい灼



瞬間、妖魔の眼ですら捕捉不能の速さに加速し、その勢いのまま突撃していく。

「お前の攻撃は読んでいるんだよっ！ 俺はあのときの十倍は強ええっ！」

バルムスが吠えると同時に、床が捲り上がり鋭利なバリケードとなってヒカルに行く手を阻む。

「こんなものおっ！」

しかしヒカルの特進は止まらない。まるで花壇を飛び越えるが如く！ 軽々と舞った少女の身体は、天井を蹴って斜め上から妖魔に襲いかかった。

「なにいつ!？」

「たあああああああつっ！」

光の矢と化した剣の軌跡が妖魔の黒い巨体に、吸い込まれ、吐き出された。

ドッシャアアアアアアアッ!!

「ぐああああああつっ!!」

袈裟切りにされ、肉塊と化したバルムスの身体がドオッと床に崩れ落ちる。血飛沫は上がらない。すべて妖刀が吸い尽くしたのだ。

「ハアハア……う……うぐう……う……う……つ」

勝利したヒカルだが、猛烈な嘔吐感に襲われ床に座り込む。

「バルムス……ハアハア……ッ」

今度こそ仕留めたという確信があった。なぜなら柄を通して、魔剣が魂を咀嚼するのを

感じたからだ。

(だけど……こんなに……ひどいなんて……)

鬼太刀の力を解放し、実際に魂を喰い尽くしたのは初めてだった。あまりにもおぞましい感触は掌から忍び込んで、ヒカル自身の魂までも浸蝕していた。

「隙だらけだぜえ！ ヒカルッ！」

「!?」

ハッと気がついたときにはもう遅かった。心の動揺が隙を生み、いつの間にか蘇ったバラムスに完全に背後を取られていた。

ドッカアアアアアアッ!

「キャアウウッ！」

強烈な体当たりにはね上げられ、ヒカルの身体が高々と宙を舞う。戦車の突進のような衝撃で、床に叩きつけられた身体のおちこちで骨が悲鳴を上げる。

「グハハハハッ！ お前が斬ったのは黒沼とかいうガキの魂だったのさっ！」

完全に正体を現したバラムスの背中から、無数の触手が伸び、ヒカルの身体を逆手の前屈姿勢に縛り上げる。大きく足を広げられ、お尻を斜め上に突き出す屈辱的なポーズだ。

「く、くそ……は、放せ……つくう……」

「これまでの借りを返させてもらうぜ！」

余った触手が、制服の襟元から侵入し、柔らかな処女の肌をまさぐり始める。

「ううっ！ や、やめろ！ はなせえっ！」

「おお……温かくて、スベスベしてやがる」

初々しい乙女の柔肌は戦闘で火照って甘酸っぱい汗の匂いを纏っている。下劣な欲情を刺激するには十分すぎる食前酒だ。

（なんとかしなくてはっ）

焦燥に唇を噛むヒカル。その気になれば殺すのは簡単だろうに、絡みついてくる触手に殺気はない。むしろ楽しむような、淫猥な情欲が伝わってくるのだ。

（まさか……私を……）

不安が的中し、触手がビリビリと制服を引き裂き始めた。スポーツタイプのシンプルなブラも罫り取られ、美麗な乳房がプルンとまろび出る。スカートも捲られて、やはり飾り気のない白のショーツが晒される。

「オッパイは小振りだな。これからいっぱいモミモミして大きくしてやるぜ」

「う、うるさいっ！ 私の身体にさわるなあっ！」

「こういうのはどうだあ？ うらあああっ！」

反抗的な態度に嗜虐欲を刺激された妖魔はグローブのような掌を振り上げると、

バシ———ンンッ！

裂けたスカートの下にのぞくむき卵のような尻タブに叩きつけた。

「うっぐううあああっ！」

骨盤がバラバラになるような衝撃で、触手に吊られた全身が大きく揺れた。

「お仕置きだ。おらっ、おらああっ！」

バシインッ！ ズバアアアンッ！ バチイン！

強烈なスパンキングに小振りなお尻はたちまち真っ赤に腫れ上がり、白桃から完熟リンゴへ変わる。痛みを超えた痛みで、下半身が腰ごと吹き飛んでしまったような錯覚に襲われた。

「少しはこたえたか。ヒカル？」

「ハアハア……うう……こんなの……ハアハア……なんともないよ」

だが半ば意識を失いながらも、ヒカルは剣を手放さない。黒い瞳もキラキラ輝いていまだに敵を睨み続けている。

「なかなかしぶといな。だが、そこがまたそそるぜ」

股間からヌッと巨大な肉棒が突き出された。

「あ……あああっ！」

バルムスの並はずれた精力を象徴するかのような、巨大な生殖器官だった。軽く三十センチを超える長さ、ビール瓶のような茶褐色の色と太さ、毒キノコのように大きく開いた傘、そして根元にぶら下がるグレープフルーツ大の睾丸。

（な、なんなの……あれは……？）

幼いころの弟のペニスしか見たことがないヒカルにとって、それはあまりにも禍々しい

肉の凶器だった。生きたミミズのようにのたうつ血管、鋭く突き出た不気味な肉イボなど、見るだけで股間が痛くなるようなおぞましい造形だ。

「驚いたか。まあ、俺のチンポは妖魔の中でもデカイほうだからな。真面目な生徒会長さんにはショックかもな。グフフ」

スカートと下着の残骸をビリビリと引き裂き、少女の聖域に熱い視線を注いでくる。

「これが最強と言われた剣士様のオマ○コか」

赤く無惨に腫れ上がった尻タブの奥底に、いかにも穢れを知らない純粹無垢のスリットがかいま見える。

ヘアは土手の上を申し訳程度に飾っているくらい薄い。秘裂は深く、ピタリ貝のように口を閉ざしており、その内側を覗き見ることはできない。

一見幼げな印象だが、熟れる前の新鮮な青い果実の魅力が、ヒカルのイメージに似合っている。

「さあ、犯してやるぞ、泉ヒカル」

グリッと灼熱棒をクレヴァスに押し当てられ、ヒカルは引きつった表情で背後を振り返る。

「ううあ……ま、まさかそれを私に……!？」

「壊しやしねえから安心しろ。まあ、相当きついとは思うがな」

まるで他人事のように嗤いながら、ズイッと剛直を突き出して先端を膣孔に潜り込ませ

てきた。

「うああああっつ！ や、やめろおおっつ!!」

ヒカルは釣られた魚のように全身を足掻かせる。妖魔に処女を奪われるなど最悪の事態だ。何よりあんな大きなモノを入れられたらタダでは済まないだろう。だが細腰を押さえつけられては、抵抗は意味を成さない。凶悪な熱塊に膣孔を強引に押し拡げられ、繊細な粘膜が最大限まで拡張されていく。

「あ、ああ……うう……いた……やめろ……この変態……つくあ……やめろおおっ！」

「グフフ。処女膜をぶち破ってやる！ らあああっ!!」

ズリユッ！ ジュブブッ、ジュブブブウウッ！

「きやあああああ—— ツッ!!」

鋼鉄の杭を打ち込まれたような激痛！ さすがにこらえきれず、ヒカルは喉が裂けんばかりの悲鳴を迸らせた。スパンキングどころではない、肉体を破壊されるのではないかというほどの痛苦だ。

「おらおら、俺様のチンポがどんどん入っていくぜ」

ギチギチッ……ミキミキッ……ギチユウウッ！

「くうああっ！ やめ……ンああああっ！ もういれるなあ……ああああっ！」

ズブリ、ズブリと寸刻みで挿入されるたび、激痛と熱さが、鋭角の楔となって身体の中に食い込んでくる。本当に身体が真つ二つに裂けてしまいそうだ。

(ああ……なんて太くて硬い……く、くるしい……)

粘膜はギリギリいっぱいまで拡張されているが、幸か不幸か破瓜の出血以外に、裂傷は見られない。とはいえ華奢な身体に、身に余る剛棒を打ち込まれて、今にも股関節が外れてしまいそうだ。

(こんな奴なんか……穢されるなんて……)

心から愛する人に捧げるべき純潔を、妖魔に強姦されて奪われるなど耐えがたい屈辱だ。ましてや母親をバルムスに嬲り殺されているヒカルにとって、おぞましい運命を呪わずにはられない。

「ハアハア……ぬ、抜け！　うう……私の身体に……き、汚いモノ入れるなあ！」

濃いめの眉をキリッと吊り上げて、憎悪の形相で敵を睨みつける。

「フフフ。まだ先しか入ってないぜ。しっかり奥までぶち込んで、俺の仔を妊娠させてやるからな」

「に……妊娠だって……ううっ、ああああああっ！」

身体の内側を削り取られるようなピストンを打ち込まれ、呻くような苦鳴を搾り出すヒカル。

「つくあ……私が……妖魔の仔を妊娠するなんて……そんなこと……ああう……あるわけがないよっ！」

過去の事例では人間が妖魔の仔を受精し、妊娠することは滅多にない。ましてや無事に



出産するなど、相当低い確率のはずだ。

「そいつはどうか。妖魔の呪術も進化するんだぜ」

意味ありげに嗤いながら、最後の一突きをぶち込む。

「うっぐううう……っっ！」

ズシリと子宮を持ち上げられ、視界がグニャリと歪んだ。

（ああ……大きい……熱い……壊れちゃう）

埋め込まれた男根の質量と熱量に圧倒される。まるで真っ赤に灼けた松明を突っ込まれたようで、身体が内側から爆ぜてしまいそうだった。

「グハハハッ！　しっかり奥まで入ったぜ。どうだ、俺様のチンポの味は？」

それでもバルムスの男根は根元から三分の一ほどが入りきらない状況で、その威容を見せている。

「はあはあ……くっ……悔しい……っ！」

綺麗な歯並びをギリギリと噛み縛り、ヒカルは上半身をガクガクと揺さぶった。

「そりゃあ、悔しいだろうなあ。親の仇に処女を奪われてよお」

「ッ!!　き、貴様！」

「お前の母親はなかなかいい具合だったぜ。フッフ、お前も極上の名器に仕込んでやるかな」

「か……母さんを侮辱するなあっつ!!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

全国書店で
**好評
発売中**

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働：ストリップまで!?
セレブ界も格差社会だ!!

42兆円踏み倒して
やりますわ
**借金お嬢
クリス**
2

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁



全国書店で
**好評
発売中**

セレブな生活を取り戻すために
魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁

42兆円を踏み倒して
やりますわ
**借金お嬢
クリス**





<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!